SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

英語科授業案：
教科で育みたい人間像「世界の人々とつながる人」

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部附属静岡中学校 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 龍弘, Coughlin, Matthew メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000494

英　語　科　授　業　案

教科で育みたい人間像　「世界の人々とつながる人」

授業者　吉　田　龍　弘
Matthew Coughlin

1　日　時　令和５年11月２日（木）　第１時　10：20〜11：10
2　学　級　１年Ｂ組　（１年Ｂ組教室）
3　題材名　**How Can We Understand Each Other?**

4　本題材で願う学び

インドネシアの子どもたちとのオンライン交流を通して、言語的・文化的背景が異なる者同士がわかり合うためのコミュニケーションを実践し、話し手・聞き手双方の創意工夫のあり方についての見方や考え方を深める。

（学習指導要領との関連：⑶話すこと［やり取り］⑷話すこと［発表］）

5　これまでの子どもの学び

子どもたちが英語で互いの思いを伝え合ったり、互いをわかり合ったりする経験を積み重ねていく中で、以下のような学びのあらわれを見とることができた。

一つめは、英語でコミュニケーションする際の非言語コミュニケーションの大切さを見いだしたことである。年度当初の題材では、英語の名刺を作成し、学校生活を充実させるための仲間を探し出す活動を行った。子どもたちは、小学校で学んできた英語表現や、「言いたいけれどうまく言えなかった表現」を追求しながら、コミュニケーションを楽しんだ。この題材を通して、子どもたちは以下のように振り返った。

- 自分が好きなものについて話すとき、熱量を表すために抑揚をつけてclear voiceやsmileで印象がよくなるようにしました。身振り手振りをつけると必死さや熱が伝わると思いました。強調したい部分の声量や抑揚に気をつけました。
- 私の英語だけでは伝わりきらないのでジェスチャーとなどで補いました。英語から離れてしまうけれど弥生時代に中国人が来て、技術などを教えたときに、言葉が伝わらないからジェスチャーでやっていたのだろうと思いました。
- あいづちを打ったり、何かしら相手が言ったことに対して反応したりすることが大切だと思いました。なぜなら、何かしら反応してくれた方が、相手も嬉しいと思うし、（私は反応してくれた方が嬉しい！）話していて楽しいと思えるからです。

（題材の振り返りより）

このように、子どもたちは言語的な視点だけでなく、「非言語コミュニケーション」に着目して会話を楽しみながら、それが実際のコミュニケーションに与える影響や、そのものの価値を見いだしていた。

しかし、聞き手として相手の発言に対して反応しようとする際、本当に相手の発言内容を理解した上で反応しているかについては、懐疑的に感じる場面もあった。子どもたちが話し手としても聞き手としても、もっと成長したいと思えるように、題材を重ねていきたい。

二つめは、相手に自分の伝えたいことを理解してもらうために、相手が理解できる英語表現を選択することの価値を見いだしつつあることである。伝える意味・内容をわかり合いながらコミュニケーションを展開していくことを願い、日常生活の自然なコミュニケーションを追求できるような題材を選定した。学校生活で実際に話題にしている「推し（お気に入りの人物）」をテーマに、実際の日常場面を再現し、英語で対話する活動を通して、子どもたちは次のような思いをもった。

- 元々英語が苦手なのですが、みんなにもわかりやすくするために簡単な英単語で説明しようとしました。そしたら伝えたかったことは伝えられたのでよかったです。
- 相手に伝わりやすい簡単な英語で伝えることが大切だと思いました。もちろん、簡単に終わりすぎて、推しのことについて、何も語れないのもよくないと思いますが、伝わらなくては意味がないので、小学校、中学校で現時点で習っているような表現を使うとよりよいと思いました。（習っている内容だけでも十分伝わる）
- 推しの魅力を伝えたいからといって難しい英語を使うのではなくて、いかに簡単でわかりやすい英語を使うかが大事だと思いました。あとは、身振り手振りを使ったり自然に話したりすることも大事だと思います。私は特に英語を完璧に話すとい

うより自然に相手にわかりやすく楽しく伝えられるようにしました。
・（これまでの授業で）コミュニケーションの楽しさを感じることができました。同時に、英語で話しかけるのは難しくてコミュニケーションの難しさも感じました。事前に調べて台本を作っていると、本当に海外に行ったときに喋れないとも感じました。
・たまには即興でやる力も大切だと思います。もしも答え方がわからなくても大丈夫！とにかく知っている英単語をつなぎ合わせればきっと伝わるし、「そこはこう言うんだよ」ってみんなが教えてくれます。だから、堂々とどんな質問にも答えることも重要なポイントになると思います。

（題材の振り返りより）

このように、子どもたちは、相手に思いを伝えるために相手の言語知識などに考慮しながら、英語表現を選択することの価値を見いだし始めた。子どもたちは、英語表現を自分のもっている知識の中で展開することの大切さや、実際にコミュニケーションの中で英語表現の知識が更新されたり、自分のものになったりすることに気づき始めていると言えるのではないだろうか。

前述したようなあらわれがある一方、依然として子どもの中には自分の伝えたいことを優先してしまうあまり、相手が理解しているかどうかを気に留めず、一方的に話してしまう姿も見られた。また、相手の言語的背景を考えず、難解な英語表現を選択するケースも度々見られた。実際、翻訳サイトを使って英語表現を調べている子どもも少なからずいた。それらの英語表現のほとんどは、中学校１年生である相手にとっては理解に苦しむ表現が多い。さらに、その英語表現を使用する本人も英文構造を全く理解できないまま使用していたと考えられる。「相手に自分の考えが伝わった・伝わっていない」「相手の考えを理解できた・わからない」などの思いを聞き手・話し手双方が実感し合えるような題材を重ねていきたい。

６　題材観

本題材では、オンラインビデオ通話を用いて、インドネシアの子どもとの交流を行う。

⑴　本題材の価値

①世界とオンラインビデオ通話でつながる

近年ではICTの普及により、世界中の人々とLINEやMessengerをはじめとしたオンラインチャットやSNSなど、オンラインで気軽にやり取りができるようになった。その中でもオンラインビデオ通話はface to faceで互いの顔の表情を確認でき、非言語コミュニケーションを可能にしてくれる点に魅力がある。オンラインチャットやSNSでは、「相手に伝わっているのか」「相手はどんな気持ちで話を聞いているのか」などの情報はあまり伝わってこない。しかし、オンラインビデオ通話であれば、相手の表情から相手の思考の状況を考察し、コミュニケーションを展開することができる。

また、言葉でうまく説明できないものについて、身振り手振りで相手に伝えたり、実物を提示したりすることも可能である。さらに、相手の背景に映る風景から生活のようすや空気感を感じたり、同じオンライン空間を共有しているからこそ、相手の存在を身近に感じられたりするのも魅力である。

②母語が異なる英語学習者同士の学び

初期の英語学習者にとって、英語母語話者とのコミュニケーションと、母語が異なるEFL（英語を外国語として学ぶ環境：English as a Foreign Language）の学習者同士のコミュニケーションは多少異なる。

英語母語話者とのコミュニケーションでは、使用する英単語や英語表現が難解であっても、相手は理解してくれるだろう。さらに、英語母語話者はEFL学習者の誤った英語表現を推測して言い直してくれたり、意図を汲み取って問い直したりしてくれることもある。

しかし、同じEFL学習者同士は、互いに英語に精通していないからこそ、相手がどのくらいの言語知識をもっているかを考慮して英語表現を選択する必要が出てくる。調べた英語表現が必ず相手に伝わるとも限らないのだ。自分のもっている英語表現の知識や非言語コミュニケーションを用いて伝える以外に方法はないのである。EFLの者同士がわかり合おうとするとき、互いがコミュニケーションの方法を試行錯誤し、限られた英語の言語知識の中でどう伝えるかという「話し手と聞き手の創意工夫」が生まれる。簡単には互いを理解し合えないからこそ、互いが通じ合えた時の達成感や充実感を感じられるのではないだろうか。母語が異なる英語学習者同士の交流は、言語やコミュニケーションそのものの価値に向き合える可能性を秘めている。

③異なる言語的・文化的背景をもつ者との交流

異なる言語的・文化的背景をもつ人との交流によって、自分の世界観を広げ、相手の文化や価値観を尊重し、その違いに寛容になることができる。

近年、海外から多くの労働者や観光客が再び来日し始めており、日本の各業界が多文化共生社会に向けて本格的に動き始めている。関連する報道の中で、「ラマダン（Ramadan）」「ハラール（Halal）」などのイスラ

ム用語もよく耳にするようになった。しかし、日本人の中にはそれが一体どのような意味をもつのかを知らなかったり、イスラム文化についてあまり好意的なイメージをもっていなかったりする者もいるだろう。インターネットで調べれば、世界各国の多種多様な文化を理解できるが、それは断片的な理解に過ぎない。

私たちは、人とかかわるとき、相手を理解する過程で、相手の言語的・文化的背景も同時に理解している。例えば、イスラム文化を知らない、またはイスラム文化に好意的なイメージをもっていなかった人であっても、同じ一人の人として実際に交流し、互いをわかり合う中で、「相手の背景にある世界」が創りだした「価値観」を理解したり、自分がもっていた知識を更新させたりしているのではないだろうか。人は「人」を通してその人の背景にある文化を理解し、異なる価値観に寛容になっていくのである。異なる言語的・文化的背景をもつ者との交流経験は、グローバルな価値観を形成し、その人の人生観に影響を与えるはずである。

⑵　本題材で願う子どもの姿

インドネシアの子どもとの交流の中で「子どもが英語を通して試行錯誤しながらわかり合おうとする姿」を願っている。

交流の中で、子どもたちは限られた英語の言語知識を使って「どのように相手とわかり合おうか」「自分の伝えたいことをもっとシンプルに伝えるにはどうしたらよいか」と思いを巡らせるだろう。そのような思いを巡らせながら、相手に伝えたい内容を吟味し、相手に伝わる英語表現を追求していく姿を願っている。

また、子どもは互いの言語的・文化的背景の違いをどのように乗り越え、理解し合えばよいか追求し始めるだろう。「どうしても英語表現が思いつかなかったらジェスチャーや絵を描いてみよう」「訛りが強いから、ゆっくり話してもらうようにお願いしてみよう」「相手の言っていたインドネシア料理がどんなものかわからないから、調べてから次の交流をしよう」などと考え、よりよいコミュニケーションに向けての方法を模索するだろう。言語的・文化的な価値観が異なることを理由にコミュニケーションを諦めるのではなく、異なるからこそどのようにすれば、わかり合えるのかを粘り強く追求していく姿を期待している。

コミュニケーション上のさまざまな障壁を乗り越えた先に、互いをわかり合える喜びが待っているはずである。この題材を通して、子どもたちが「世界の人と心がつながる感動や実感」を「英語を通したコミュニケーションの魅力」とともに味わってくれることを強く願っている。

7　題材構想（全19時間）

①Let’s Make Friends Oversea!（１時）
②How Can We Understand Each Other?（２～９時）
　※交流は第１・５・９時
③The Presentation for You（10～17時：本時は10時）
　※交流は第13・17時
④Making a Video Letter（18～19時）

8　題材構想における授業者の考え

オンライン交流する相手はインドネシアの学校で、同じように外国語として英語を学ぶ子どもである。時差はあまりないため、互いに日中の英語の授業の中で交流を行う。

授業者は、海外との交流を単に「英語を使うこと」「異文化を体験すること」などを目的とする活動ととらえていない。子どもたちが学びの中で「自分の声（言葉）に感情や思いを乗せてつながり合うことの感動や実感」を、英語を通して味わってもらうために、本題材を設定した。

子どもたちが「人とつながり合う感動や実感」を味わいやすくするため、複数回あるオンライン交流のあとには必ず振り返りの時間を十分に確保し、相手に適した英語表現やコミュニケーションのあり方に思いを巡らす時間を確保する。また、交流を振り返る際に、母語を用いて会話の内容を思い出しながら表現を確認したり、実際の交流で互いの英語の言語知識を補い合ったりできるよう、オンライン交流は原則、日本の子ども２名に対し、インドネシアの子どもも２名のペアリングで行うように設定する。

⑴　Let’s Make Friends Oversea!（１時）

第１時は、実際にインドネシアとオンラインでつながる。授業者は「オンラインで海外と交流する」とだ

け伝え、どこの国と交流するかは伝えない。そうすることで、子どもは画面の向こうにどんな人が現れるのかワクワクしたり、オンラインでつながった際に相手がどこの誰なのかを聞きたがったりするだろう。なお、初対面ならではのコミュニケーションを楽しむため、特にここでは英語表現の事前準備などの時間はとらない。

⑵ How Can We Understand Each Other?（２～９時）

第２～４時、および第６～８時は子どもが交流を振り返り、どのようにすればもっと互いのことをわかり合えるのかを試行錯誤し、思い思いに追求をする。英語表現やコミュニケーションのあり方に思いを巡らす時間を十分に確保し、子どもの学びの思考（何を使って追求するか、どこで追求するか等）を大切にする。

⑶ The Presentation for You（10～17時）

第10時に授業者は「最後の交流日（第17時）に交流相手にプレゼンテーションをする」ことを伝える。これまでの３回の交流で達成感や充実感を感じていることだろう。しかし、うまく相手に伝えることができなかったり、もっと伝えたかったのに時間がなかったりしたこともあると考えられる。子どもたちがここまでの交流を振り返ったとき、心の中には「もっと伝えたい」「あのことについても伝えたかった」という思いがあるだろう。そのような思いを形にするために、プレゼンテーションを題材の中に設定した。

プレゼンテーションのテーマはあえて設定しないが、子どもたちは「コミュニケーションを重ねたからこそわかる相手にとって興味のある話題」を軸に「相手に伝えたいこと」を選択するだろう。

⑷ Making a Video Letter（18～19時）

しばしの別れを惜しむ気持ちと世界の人々とつながった感動や達成感を得る大切な締めくくりとして、ビデオレターを作成する。

９　予想される子どものあらわれ

時数	活動、問い	子どものあらわれ
1	**Let’s Make Friends Oversea（１時）** **【ワクワクする出会いをし、初対面ならではのコミュニケーションを味わう】** ○海外とオンラインで交流することを伝える ○オンライン交流を行う	・画面の向こうの相手はどこの国のどのような人なのだろうか。アメリカ人だろうか ・英語が苦手だからドキドキする。相手とわかり合えるだろうか ・相手の子はインドネシア人だとわかった ・相手が話していることがわからない ・無言の時間が続いてしまって気まずい。どうすればいいのだろうか ・英語でどう言えばよいのかわからない
２～４	**How Can We Understand Each Other?（２～９時）** **【相手とどのように英語を通してコミュニケーションするか試行錯誤する】** ○どのようにすればもっと互いのことをわかり合えるのか	・インドネシアはどのような国なのだろう ・相手も英語がわからないのに、どのようにコミュニケーションすればよいのだろうか ・無言の時間が長かったので、聞いてみたいことをまとめておこう ・どうしても伝わらないのであれば、絵を書いたり、身振り手振りしたりしてなんとか伝えるしかないだろう

		・私が聞きたいことは英語でどのように表現すれば良いのだろう。翻訳サイトをつかってみよう
5	○第２回オンライン交流を行う	・翻訳サイトの英語を使って相手に尋ねても、相手は理解してくれなかった……相手も難しすぎる英語は理解できないのだろう ・前回よりも聞きたいことをたくさん聞ける。しかし、相手の言っていることがよくわからない ・好きな食べ物が現地の食べ物でどんなものかわからない。「ハラール」とは何だろうか ・わからなかったことをそのままにすると、そのあとのコミュニケーションが止まってしまうことに気づいた
6～8	○どのようにすればもっと互いのことをわかり合えるのか	・翻訳サイトの英語は少し参考になるが、そのまま伝えても相手に伝わらないかもしれない ・もっと相手のことを知ってみたい。前回うまく聞けなかったことを、もっと深く聞いてみたい ・コミュニケーションが止まってしまったときに、どう切り替えれば楽しく会話が続けられるのだろう
9	○第３回オンライン交流を行う	・前回の交流で疑問だったことを聞けて、相手のことがもっとわかった ・イスラム文化は独特で、以前まで自分が思っていたイスラム教のイメージとは違う
10	<u>The Presentation for You（10～17時）</u> **【相手のことを考えてプレゼンテーションをつくる】**	
	○これまでの交流がどうだったか問う	・なかなか伝えたいことが伝えられなかった ・事前準備したとしても、話題が広がってしまって、英語が全然出てこなかった ・もっと深く話したいし伝えたい ・簡単な英語の方がわかり合える
	○最終交流日にプレゼンテーションをすることを伝える ※「コミュニケーションを重ねたからこそわかる相手にとって興味のある話題」を軸に「相手に伝えたい内容」を選択するよう助言する	・プレゼンテーショではどんなことを伝えればよいか
10～12	○プレゼンテーションで伝えたいことを考える	・日本にいつか行ってみたいと言っていたから、それについてプレゼンしよう……相手はどのような場所に行きたいのだろうか ・インドネシアでは日本のアニメが人気だと言っていたが、インドネシアでは何の日本のアニメが放送されているのだろうか

		・日本で日本食を食べたいと言っていたが、イスラム教は豚肉を食べてはいけないはずだ……実際はどうなのだろうか
13	○第４回オンライン交流を行う	・日本に来たら富士山を見てみたいと言っていた。富士山がきれいに見えるところは静岡にも「三保松原」など、たくさんあるので、それをプレゼンテーションに生かそうと思う ・インドネシアで放送されている日本のアニメは古いアニメが多いと分かった。相手はきっと最新のアニメにも興味があるだろう
14〜16	○プレゼンテーションを作成する	・どのような英語表現を使えば相手はわかってくれるのだろうか……翻訳サイトを使っても、そのままは使用できないことを今回の交流で痛感した ・難しい英語を使うのではなく、できるだけわかりやすい英語を使ったうえで、写真などを使ってイメージしやすくしたい
17	○第５回オンライン交流を行う （プレゼンテーションする）	・相手が興味もって聞いてくれて嬉しかった ・本当に理解してくれたか、心残りがある ・せっかく互いにわかり合い始めたのに、交流が終わるのは少し寂しい
18〜19	**Making a Video Letter（18〜19時）** **【インドネシアの友人との日々を振り返りながら、思いをビデオレターに紡ぐ】**	
	○交流を振り返り、交流相手にビデオレターを作成する	・短時間だったけれど、とても仲良くなれて、海外に初めて友だちができたように感じる ・今度は実際に会ってみたい ・相手が日本に遊びに来たときには、絶対に紹介した場所を案内したい
19	○交流を振り返る	・相手を理解するには、相手をわかろうとする思いが何よりも大切で、それが言葉を学ぶうえで大切なことなのだろう ・翻訳アプリを使ってコミュニケーションしたら、ここまで仲良くはなれなかったかもしれない……自分の言葉でなんとか伝えようとすることに価値があるのだろう

参考文献：稲垣佳世子・波多野誼余夫（1989）『人はいかに学ぶか―日常的認知の世界』中公新書
Kecskes, Istvan.（2019）*English as a lingua franca: The pragmatic perspective.* Cambridge University Press.
吉田龍弘・白畑知彦（2023）「英語の授業における表現欲求時指導法」『第二言語習得研究の科学２―言語の指導―』105-123　くろしお出版
参考資料：外務省「わかる！国際情勢Vol.76 インドネシアという国」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol76/index.html